

与謝野晶子作…鉄幹哀悼の短歌「寢園」をめぐって

西村 富美子

与謝野晶子に「寢園」と題する一連の短歌があり、『冬柏』（第六巻・第五号）に掲載されている。

この「寢園」の短歌は、夫鉄幹が亡くなった後の五七忌（三十五日）以後に作られたものであり、この短歌群にはそのものとなる漢詩があった。

その漢詩についてまず説明をしておく、作者は吉田学軒、三十五日忌に晶子に贈られた「鉄幹追悼の漢詩」、七言律詩一首である。七言律詩は七言八句の形式であるから用いられた漢字は五十六字である。その五十六の漢字をそれぞれ一字ずつ短歌一首に詠みこんで、計五十六首の連作の短歌としたのである。ただこの短歌群は本来なら五十六首で完結するはずなのだが、五十一首の短歌が続いて載せられている。その掲載の形式は、後に示すように、五十六首の歌のところに「（以上）」と記し、晶子自らの創作の哀悼歌五十一首が続いている。

従って、『冬柏』所載の鉄幹哀悼の晶子の短歌は、五十六首＋五十一首であり、計一〇七首である。前半の五十六首は吉田学軒の漢詩に基づくもの、後半の五十一首は晶子による哀悼歌いわゆる挽歌であり二部構成になっている。なおこの「寢園」の連作の短歌は、晶子が没して後に平野万里によって編輯刊行された遺稿歌集『白桜集』にも収録されているのだが、五十六首に続く追歌が二十首ほど削除されて三十二首となっている。つまり晶子の「寢園」と題する鉄幹哀悼の歌、

与謝野晶子作…鉄幹哀悼の短歌「寢園」をめぐって

挽歌は、

- 一 『冬柏』第六巻・第五号（昭和十年五月）
五十六（五）首＋五十一首 計一〇七（六）首
- 二 『白桜集』（昭和十七年九月）
五十六（五）首＋三十二首 計八十八（七）首

の二種類が伝えられているということである。

この「寢園」の短歌には、以上述べたように晶子の作った短歌の中では作歌に関して特殊な事情があり、異色の短歌群と言えるのではないだろうか。

しかしこの「寢園」の歌群には幾つかの疑問が存在する。たとえば〇五十六（字）首と五十五（字）首

「寢園」の短歌は晶子が言うように「吉田学軒」から贈られた七言律詩の漢字、すなわち五十六字の漢字をすべて用いて詠まれたのであれば短歌は五十六首なければならないのだが、実は五十五首しかなく一首不足なのである。それはなぜだろうか、という疑問をはじめとして先に述べたように謎の多い短歌シリーズなのである。

これらの問題点には、推測により解明可能なものと疑問点の提起に終わるものがある。この二種類の複数の問題点について論究してみ

与謝野晶子作…鉄幹哀悼の短歌「寢園」をめぐる

ようというのが本稿の主旨である。

論を進めるに当たって、先ず初めに「冬柏」所載の「寢園」と題する晶子の作品、一〇七（六）首の短歌を紹介しておくことにしたい。

寢園 与謝野晶子

〔冬柏〕第六卷・第五號

故人の五七日に吉田学軒先生より「楓樹蕭蕭
杜宇天。不如歸去奈何傳。讀經壇下千行淚。
合掌龕前一縷香。志業未成眞可恨。聲名空在
轉堪憐。平生歡語幾回首。舊夢茫茫十四年。」
といふ詩を賜りたれば、この五十六字を一つ
づつ歌に結びて詠める。

青空のもとに楓のひろがりて君無き夏の初ま
れるかな
一 楓
山の上大樹おのづと打到れまたあらずなる空
に次ぐもの
二 樹
蕭蕭と萬里と云ふ名選ばれし子等の二十と君
が三十
三 蕭
わが机地下八尺に置かねども雨暗く降り蕭や
かに打つ
四 蕭
桜過ぎ五七日には傳ひ行く雑木の杜のまだら
の若葉
五 杜
一人にて負へる宇宙の重さよりにじむ涙のこ
こちこそすれ
六 字

君が行く天路に入らぬものなれば長きかひな
し武蔵野の路
七 天
あな不思議白き柩に居給ひぬ天稚彦と申す神
の子
八 不
魂は失せ魄滅びずと道教に云ふ如魄の歸りこ
よかし
九 如
いつとても歸り來給ふ用意ある心を抱き老い
て死ぬらん
一〇 歸
哀れなり妻と子等より君去りて音なふ日なく
見給ふ期なし
一一 去
備りぬ奈良の佛は金を塗り君は塗らねど端嚴
の相
一二 奈
武蔵野の若葉の上に雹降りぬ何事ならず天悲
しめり
一三 何
君なくて憐むべしと云ふなかれ師が衣鉢をば
傳へたる弟子
一四 傳
取り出でて死なぬ文字をば讀む朝はなほ永久
の戀とおぼゆる
一五 讀
いみじかる歌を作りて時經ると佛の説かぬ極
樂淨土
一六 經
妙高も淺間の山も壇としてまつらん君を多磨
の野に置く
一七 壇
都より下荻窪に移り來て十年歌へるむさし野
に死ぬ
一八 下
心なる悲しみの花千枝白し世は淺みどりくれ
なるにして
一九 千
阿佐が谷の近江博士の許へ行く服喪の人も藥
を得べく
二〇 行

生くる世の業報のうちさるもののありや教へ
 よ涙の地獄
 ありし日と今日を合せて世と云はばうらなつ
 かしくいとはしきかな
 たなごに掌を置く口びるに末期の水を参れ
 る後も
 亡き魄の龕と思へる書齋さへ田舎の客の取り
 散らすかな
 世を去りて三十五日この家にわれと在りしは
 五十日前まで
 一生の終りにわれを君呼びき何ぞ佛の至現な
 らんや
 なつかしく縷縷と語るを病床の無言に聞ける
 日も歸り來よ
 筆硯煙草を子等は棺に入る名のりがたかり我
 れを愛できと
 繼ぎぬべき志をば説く時も父に似る子が猿樂
 を云ふ
 業成るといはば云ふべき子は三人他はいかさ
 まにならんとすらん
 わが云ふは旅と仕事をしたる人子等の語るも
 未だありし日
 君が死を假ぞと云はば假ながら眞なりけり正
 しく見れば
 われ死なずことは一切顛倒す悲しむべしと歎
 きしはなし
 辛かりし世をも恨まず云はずして山の如くに
 いましつる君

二一 涙
 二二 合
 二三 掌
 二四 龕
 二五 前
 二六 一
 二七 縷
 二八 香(煙)
 二九 志
 三〇 業
 三一 未
 三三 眞
 三四 (可)
 三五 恨

わりなけれ似ると思ひし子の聲も似ざる聲を
 ば聞かんとぞ思ふ
 いかならん善き名負ふとも入りがたき三昧境
 を得てありしかな
 藤の花空より君が流すなる涙と見えて夕風ぞ
 吹く
 在し在さず定かならずもわれ思ひ人は主人の
 無しとする家
 自らを轉生したる君として慰むらんか時經た
 ん後
 人の世に君歸らずば堪へがたしかかる日す
 に三十五日
 君がある西の方よりしみじみと憐むごとく夕
 日さす時
 平らかに今三とせほど十とせほど二十年ほど
 もいまましかば
 死ぬことと生き行く苦をば初めより魂魄のな
 き物にくらぶる
 歡びとしつる旅ゆえ病得て旅せじと云ひせず
 なりにけり
 物語御法の巻ののちなるはただ一とせのまば
 ろしの巻
 自らをクリストの師のヨハネにて足るとした
 りし幾つの事績
 いたましき君が春かな六十三度全く回らず終
 りたりけれ
 柏亭の椿を添へて上梓さる全集の後二千五百
 首

三六 聲
 三七 名
 三八 空
 三九 在
 四〇 轉
 四一 堪
 四二 憐
 四三 平
 四四 生
 四五 歡
 四六 語
 四七 幾
 四八 回
 四九 首

与謝野晶子作…鉄幹哀悼の短歌「寢園」をめぐって

手をわれに任せて死にぬ舊人を忘れざりしは 三十とせ前	五〇	舊	寂しけれ生死の差より大いなるその世と今日 のわが變りざま	六四	〇
今日もなほ憂き夢醒めんこちする痴愚の思 ひに保たるるわれ	五一	夢	花散りて木の常磐木に變りたる如く法師は云 ひたまへども	六五	〇
日と夜を茫然として積み行くは泣く慣ひより 劣るならまし	五二	茫	ありし日に覚えたる無と今日の無とさらに似 ぬこそ哀れなりけれ	六六	〇
茫茫と吉田の大人に過去の見え其れよりも濃 くわれに現る	五三	茫	一人出で一人歸りて夜の泣かる都の西の杉並 の町	六七	〇
取りて泣く隣の閨にさしのぶる十七の子の細 き手の指	五四	十	街道のとり除けらるる杉の木を君が移せる采 花莊これ	六八	〇
神田より四時間のちに歸るさへ君待ちわびき われはとこしへ	五五	四	君を見し夢の話も自らに語る外なき朝つづく かな	六九	〇
忘れよと云ふ悲みはことごとく忘れき君とあ りし年月(以上)	五六	年	かこたれぬ惜むべきをば惜まずてかかるわが 世を作り給へる	七〇	〇
おんいのち天を見せよと云ひてのち二十四時 はありつるものを	五七	×	悲みが損ふことを何ならず思へる身とは人知 らずあれ	七一	〇
睡げにも目を閉じたりし後なれば醒むべき君 に云ふこと積る	五八	〇	われと居し三十五年そののちは邊りするなり 武蔵野の土	七二	×
廊下踏み書齋へ向けば見る夢の消えぬ書齋の 口に至れば	五九	×	末の露もとの雫の歌ひきてわれを泣かしむ下 根の僧も	七三	〇
あさましや南の伊豆にことはぎし君が六十三 春かこれ	六〇	〇	見しまでは天に向ひて合掌をしたまひしかな うつそみの殻	七四	×
過去を皆失ひはてぬ君がごと死なでかかるは 苦しかりけり	六一	×	形無き世の何となり残るらん常に思へば君わ れとなる	七五	×
源氏をば一人となりて後に書く紫女年若くわ れは然らず	六二	〇	君つひに無の世に移りはててのちわれの住め るも半は無の世	七六	〇
寢園に石の馬をば奉るとて奉天の子のかはせ 著く	六三	〇	移り住み寂しとしたる武蔵野に一人ある日と なりにけるかな	七七	〇

わが夢に下品下生を賜ると君告げぬなり思ひ
上れば
萬物の榮枯を知らぬ身のやうにわれ一人をば
歎かれぞする
書き入れをする鉛筆の幽かなる音を聞きつつ
眠る夜もがな
共に生き共に死なずて自らの反古にひとしき
世の初まりぬ
通夜の儀にあづかる人を見てありぬ海のホテ
ルの初春のごと
晝と夜の移り変りに似ぬことよ諸共にある後
れて泣ける
歸らぬかおんおくつきの椿より末の娘はをさ
なきものを
われは世に業の姿をとどむらん椿つづきて花
落つれども
二人にて常世の春を作れりとわれなほ半思は
るるかな
かの世とは西東など云ふやうに誰れも云ふな
る所なれども
悲しかる虚無の虚無をばわれは知り僧は説く
なり人間の戒
うづたかき若葉を見れど武蔵野の赤風通ふ塚
のうしろに
病して鶯硯臺に上らねば君も上らで終りける
かな
大机二尺をおかず慣ひたる小き机もあはれな
りけれ

七八 ×
七九 ○
八〇 ○
八一 ×
八二 ○
八三 ×
八四 ×
八五 ×
八六 ○
八七 ○
八八 ○
八九 ○
九〇 ○
九一 ○

思ひ出は尺とり蟲がするやうにくくめいなら
ず過現無差別
ありとせん開き給はでとこしへに及ぶ二つの
おん手の中に
わが背子を綿のやうには包まずて錦もてしぬ
過ちにけん
この世など廣きを云はずかこたれぬ書齋に一
人留めたまへる
亡き後の哀れの中に思ひやる佐渡に一人のう
づくまる弟子
旅はせじ海も淺葱の羽二重を着て目を閉ぢし
君に見えまし
迎ふるは旅路のはてにあらぬなり釋迦の定め
し七七のはて
亡き人の古き消息人見せぬ多少は戀にわたり
たる文
なきがらの雙手やうやくたゆからん組みたる
ままのおん五十日
山を若葉包めり世にあらば君が初夏われの
初夏
二三町來てのぞまれぬ墓じるし愁ひをひかじ
帆柱ならば
三月をわれと椿と守るなり外に五月のをびや
かせども
壁の鈴ゆききに君が肩觸れて鳴りたる音をま
た聞く夜無し
燈明を消して暫く初夏のひかりを送る冬柏院
に

九二 ○
九三 ×
九四 ○
九五 ×
九六 ○
九七 ○
九八 ×
九九 ○
一〇〇 ○
一〇一 ○
一〇二 ×
一〇三 ×
一〇四 ×
一〇五 ×

与謝野晶子作…鉄幹哀悼の短歌「寢園」をめぐって

おほけなく咫尺も知らぬ闇のごとこの世を思

一〇六

×

ふ身となりけり

あぢきなき未了の因に因りて斯く一人ある日

一〇七

○

の盡きざるならん

※歌の下には便宜上、漢数字の番号を付した。

※「三二」は欠番（後に説明を加える）である。

※○・×の記号は『白桜集』収録の有○・無×を示す。

※短歌の書式体裁、漢字・仮名遣いは『冬柏』のままとした。

以上挙げた「寢園」の内容、短歌に基づいて筆者が問題点と考えるところを順次述べていこうと思う。

先ず「寢園」の連作の短歌のもとになった吉田学軒の漢詩について解説をしておきたい。

○吉田学軒の追悼の漢詩

「寢園」の冒頭に記されている吉田学軒の漢詩は、

楓樹蕭蕭杜宇天

楓樹蕭蕭 杜宇の天

不如歸去奈何傳

不如歸去 奈何ぞ伝えん

讀經壇下千行淚

壇下に経を読むに千行の涙

合掌龕前一縷香

龕前に掌を合わせば一縷の香

志業未成眞可恨

志業未だ成らず 眞に恨むべし

聲名空在轉堪憐

声名空しく在りて 転た憐れむに堪えたり

平生歡語幾回首

平生の歡語 幾たびか首を回らす

舊夢茫茫十四年

旧夢 茫茫たり 十四年

（書き下しは筆者による）

という七言律詩である。一・二・四・六・八句に押韻し、韻字は下平一・先（平水韻）である（ただし第四句の「香」は除く）。内容は、

「ほととぎす」に関する詩語を用いて晶子の悲嘆の思いを表現したものである。紀元前の周王朝末の蜀王の杜宇が即位後に望帝と称し、望帝の死後その魂がほととぎすに化した等の伝説が四川地方に生まれた。「杜宇」はほととぎすを意味する。その鳴き声は血を吐くような悲痛な声で、「不如歸去」（行かないで）と聞こえるという。夫寛を失った晶子の泣き声を喩えたのである。

漢詩のおおよその意は、

楓の樹に蕭蕭と風が吹き、ほととぎすの鳴く初夏の空、「不如歸去」の声をどのように伝えればよいのだろうか、

仏壇のもとで経を読んでは千すじの涙を流し、仏を安置した仏壇に手を合わせれば、一すじの線香の煙がたちのぼる。

志した事（業）が完成しなかったのがきつと恨めしいにちがいない。世間の名声だけがむなしく残されて悲しい思いがする。

かつてのいつもの楽しい語り合い、幾度となくふりかえってみる、昔の古い夢ははるかで、十四年の歳月が流れてしまった。

であり、詩の前半は頼る伴侶を失った晶子の哀切な感情を「不如歸去」を比喩の題材に用いてうたい、後半は鉄幹と吉田学軒との交流を振りかえっている。吉田学軒と鉄幹との交流は大正十一年（1921）の森鷗外の死がきっかけであった。「鷗外全集」の編輯主任となった鉄幹は生前鷗外と親交のあった学軒と知り合い、以後学軒に師事して数十年ぶりに漢詩の学業詩作を再開し、以来両者の間に十四年の歳月が流れたことをいう。なお吉田学軒の名は「寢園」の第五十三首の歌にも見えており、

茫茫と吉田の大人に過去の見え其れよりも濃くわれに現る

と学軒の漢詩の末句の「旧夢茫茫たり十四年」を受けて、この歌に晶子自身の思いを詠んでいる。「吉田の大人」（吉田先生）は学軒のことで、鉄幹との交流、過去は十四年だが、晶子とはさらに長い三十五年を共にした歳月があり思い出ははるかに濃く自分のところには現れ

るのだと鉄幹への熱い思いを表現している。なお学軒は鉄幹死去の翌日に家を訪れ、雪の残る庭の梅の幹にたてかけられた白木の墓標に、涙を拭いながら「与謝野寛之墓」と筆を揮ったという。また鉄幹の法名「冬柏院雋雅清節大居士」をつけたのも学軒であった。

ただ、この漢詩の題は不明である。晶子も「故人の五七日に吉田学軒先生より……という詩を賜りたれば、」と言うのみなので、詩の題があったのか無かったのか、書翰の文面の流れの中で詩だけが記されたのか全く分からず、他に証する資料も存在しない。

この漢詩が晶子の「寝園」の連作の短歌のもとになった。

○「寝園」という題名

「寝園」の短歌群を論じる前にこの「寝園」の歌題について少し述べておきたい。

晶子はこの五十六(五)首あるいは一〇七(六)首の短歌の連作に「寝園」と題したが、この命名もいささか問題なのである。何故なら、「寝園」は中国の天子の陵墓、墓あるいはその傍らに作った天子の霊を祀った所であり漢代からすでにあった。また「寝園」は「寝廟」とも言いこれもすでに先秦時代から存在したものである。すなわち古来中国では一般人の墓には「寝園」の語は用いない。晶子がなぜこの言葉を用いたのかその真意は分からないが、その謎を解く鍵は「寝園」の歌群に続く付録の短歌の中にあるのかも知れない。それは、

寝園に石の馬をば奉るとて奉天の子のかはせ著く 六三

の歌一首である。歌中の「奉天の子」は鉄幹の三男の麟氏であり晶子のもとに為替を送金してきたのである。当時、麟氏は奉天(現在の遼寧省瀋陽)にある満鉄図書館に勤務しており、三月二十九日には帰国したが告別式も済み多摩墓地に遺体も埋葬された後であった。「寝園」に「石馬」をまつるのは中国の天子の陵墓に見られる風景であり、

与謝野晶子作…鉄幹哀悼の短歌「寝園」をめぐって

晶子はこの慣習を知らなかったのかも知れない。麟氏は為替送金に付した手紙に「寝園に石の馬を奉りたい」という添え書きをしたのかとも考えられるが、何れにしても寛の墓に「寝園」の表現は適切とは言えないことは確かである。

なお晶子がかつて夫鉄幹とともに中国、満州を旅行し奉天を旅したことがあり、清の太宗の陵墓北陵を訪れている。晶子は

門外で拝観券を買って、入口の大きな牌樓を過ぎると、左右は松柏の老樹が深林を成し、広い路の両側に豹、獅子、馬、駱駝、象の大きな石像が或は立ち或は臥している。

と記し、またその時の鉄幹の歌に、

北陵に立つ石の馬石の象いよいよ山を静かにぞする

という一首がある。同行の晶子も陵墓の石馬を見たので、その印象が強く心に残っていたこともあるかという推測もできる。これらのことが晶子の「寝園」と命名した拠り所ではないかと推察される。

○五十五首(五十六首)の短歌

次に、初めに述べた五十六首と五十五首の短歌の歌数の相違について述べる。

晶子は「寝園」の歌群の前に学軒の漢詩を挙げて「……と云ふ詩を賜りたれば、この五十六字を一つづつ歌に結びて詠める」と、七言律詩の五十六字を一字ずつ用いた短歌を自分が詠んだと述べている。ところが実際には短歌は五十六首ではなく五十五首しかなくて、一首不足しているのである。「冬柏」の後に編輯された『白桜集』もまた然りである。晶子の単純なミスによるものなのか意図的な結果なのか判断の難しいところである。

五十六(五)首と記したのはこうした事情を意味するのである。短歌一首が不足しているのは、短歌の第三十二首(欠番とした歌)、

与謝野晶子作…鉄幹哀悼の短歌「寝園」をめぐって

律詩で言えば第五句の四字目の「成」である。

この点については、第三十首の短歌

業成るといはば云ふべき子は三人他はいかさまにならんとすらんは、本来ならば「業」の漢字に相当する短歌である。

そして次の第三十一首は「未」の漢字に相当する短歌なので、脱落しているのは「成」の漢字に相当する短歌である。その脱落の理由は「成」を含む適当な短歌を作り得なかったのかとも考えられるが、先に挙げた第三十首の短歌に「成」の字も併せ用いて「業成る」という表現を晶子は創作したのだと考えるのが妥当ではないだろうか。「業」「成」の漢字二字で第三十首の短歌一首を作ったのである。従って「第三〇首（第三二首）」と表記したほうが実状に適っている。ちなみに「業成」は漢語ではなく晶子の新造語である、という筆者の推論が容認されるならば、第三十首の短歌に本来あるべき第三十二首の短歌が含まれているとの解釈が成立し、さらに本来五十六首あるべき短歌が一首不足の五十五首であることの説明も理解されるであろう。

なお、この歌にいう「三人」とは、長男光、次男秀、三男麟を指している。当時長男の光は三三歳、東京済生会病院内科の勤務医であり、次男の秀は三一歳、外交官としての海外勤務を終えて外務省の欧亞局に勤務、三男の麟は二六歳、三年前に法政大学を卒業後満州に行き満鉄図書館に勤務して奉天に滞在していた。五男六女の十一人の子どものうち「業成る」といえるのはこの三人の男子だけであった。次女の七瀬は結婚後夫に先だたれて未亡人であった。末娘の六女藤子は数え年十七歳で女学校在学中であった。まだ一人前ではない子ども八人を残しての鉄幹の急死であり、晶子の心中は夫鉄幹の死に対する歎きばかりではなかったであろう。

○第二十八首の短歌と漢詩の第四句の末字

次に第二十八首の短歌と、漢詩の第四句の末字の問題である。

第二十八首の短歌は、

筆硯煙草を子等は棺に入る

名のりがたかり我れを愛できと

であり、鉄幹の納棺の場景を詠んだものである。筆・硯・煙草をこどもたちが父の棺の中に入れるのだが、傍らで見ている晶子はどの愛玩物よりも自分が最愛の対象だったとは子等への手前名乗れなかった心情を詠んでいる。

この短歌一首の漢字一文字に相当するのは、第四句の末字、「香」である。対句構成の所なので、第三、四句を挙げれば、

讀經壇下千行淚 壇下に經を読むに千行の涙

合掌龕前一縷香 龕前に掌を合わせば一縷の香

であるが、この「香」の字が問題なのである。まず先の第二十八首の短歌には「香」の字がどこにも見えない。

さらに第四句の末字は押韻をするところである。この七言律詩は、第一・二・四・六・八句で韻を踏む、つまり「天」「傳」「香」「憐」「年」の漢字は同じ韻の字でなければならぬ。「香」以外の韻は、下平の一・先である。ちなみに「香」の韻は下平の七・陽であり、先は「an」、陽は「ang」でまったく異なる韻である。従って「香」の字は正確ではなく不正確な漢字ということである。

「香」の字が晶子の短歌にも無く学軒の漢詩でも不的確で、全く両者とは無関係の漢字だということである。

ところが難儀なことに、この「香」の漢字は、「冬柏」・「白桜集」また森藤子氏の随筆「吉田増蔵先生のこと」にも「香」の字で記されている。もともとの学軒の書翰があれば直ちにこの疑問は解けるのだがそれは期待できそうにない。漢文漢詩の大家である吉田学軒が押韻の箇所の漢字を間違えて作詩することなどは絶対にありえないので、書翰の字の誤読か或いは初出の「冬柏」の誤植か、そのどちらかであ

る可能性が強いように思う。

筆者はこの両者のうち後者ではないかと推測している。この仮説の根拠は晶子が見た学軒の書翰またそれをもとに短歌を作った漢詩の第四句の末字には正確な漢字が書かれていたのではなからうか。その字はこの第二十八首の短歌にある「煙草」の「煙」である。「煙」は下平の一・先の韻で、この漢詩の押韻の漢字と同一である。漢詩の第四句でも「一縷の煙」の方が立ちのぼるひとすじの線香の煙の叙景としてふさわしい。

従って学軒から贈られた本来の漢詩には「一縷の煙」とあったのだとの推測はかなり確率が高いのではなからうか。

○漢詩の漢字が使われていない歌

次に学軒の漢詩の漢字が用いられていない歌があり、それはどう解釈すべきかという疑問がある。それは第三十四首の

われ死なずことは一切顛倒す悲しむべしと歎きしはなし

である。学軒の漢詩の第五句の第七字「可」の字であるが晶子は平仮名「べし」を用いており、『白桜集』もまた同じである。意図的なかどうかは分からないが、故意とまでは言えなくとも、敢えて「可」の漢字表記は避けたのではないかというようにも思える。

○第二首の歌

次に、明らかに誤植ではないかと思える所がある。それは第二首の短歌の

山の上大樹おのづと打到^{たいじん}れまたあらずなる空に次ぐもの
の「到」の字で、「倒」の字の誤植であろう。書体の類似でもあるが、『白桜集』には「倒」の字に修正されている。

○『冬柏』と『白桜集』の短歌の構成及び制作時期

与謝野晶子作・鉄幹哀悼の短歌「寢園」をめぐって

最後に、『冬柏』と『白桜集』の歌群の構成に関する問題である。これは今まで述べてきた「寢園」の問題の中で最も重要かつ難問ではないだろうか。

『冬柏』 五十五首+五十一首 一〇六首

『白桜集』 五十五首+三十二首 八十七首

晶子が「寢園」と題した一連の短歌は、「五七日」つまり三十五日忌に吉田学軒から贈られた漢詩がもとなった短歌五十五首（五十六首）、とそれに続く五十一首の計一〇六首が「冬柏」（第六巻第五号、昭和一〇年（1935）五月二十八日発行）に掲載されたものである。

しかし七年後の昭和十七年（1942）五月二十九日に晶子が死去し、その年の九月五日に刊行された『白桜集』（平野万里編、改造社）に収められた「寢園」には前半の学軒の漢詩をもとにした短歌は同じく五十五首なのだが、続く五十一首の短歌は三十二首を採択して十九首は削除している。

『白桜集』の編輯は平野万里が行ったものであるが、削除の方針には何か基準があったのだろうか、詳細は不明である。

ちなみに、鉄幹死後の法要と「寢園」の歌の関連を少し述べると、

鉄幹の五七忌は四月二十九日、「寢園」の連作の短歌の中にも、

五 桜過ぎ五七日には…

二五 世を去りて三十五日…

四一 人の世に君歸らずば…かかる日すでに三十五日と詠まれている。

また五十日忌は五月十四日で、すでに初夏の候である。それは同じく「寢園」の連作の短歌にも、

一 青空の…君亡き夏の初まれるかな

三八 藤の花空より君が流すなる涙と…

四九 柏亭の椿を添へて…上梓さる全集の後二千五百首

与謝野晶子作…鉄幹哀悼の短歌「寝園」をめぐる

さらに続く連作歌にも

一〇〇 ……組みたるままのおん五十日

一〇一 ……若葉包めり…君が初夏われの初夏

一〇三 ……三月をわれと椿と…外に五月のをびやかせども

と五十日忌が詠まれている。

そこで、「寝園」の連作歌の制作に関する事柄及び日時を整理しておくならば、

〇五七忌・三十五日

四月二十九日

※『与謝野遺稿歌集』長男光編

五月十一日刊行

〇五十日忌

五月十四日

※『冬柏』『寝園』の連作歌

五月二十八日発行

※『白桜集』（『寝園』の連作歌）

昭和十七年九月五日刊行。

（平野万里編）

という順序であり、晶子の「寝園」一連の短歌は夫鉄幹死去の五十日忌後に詠まれたものである。すなわち五七忌の吉田学軒からの追悼の贈詩、七言律詩の五十六字の漢字は発端となったが、五十日忌を過ぎ次の『冬柏』発行までの間に晶子はこれらの一〇六首の短歌を詠んだのである。第一首の

青空のもとに楓のひろがりて君亡き夏の初まれるかな

は五七忌の四月末よりも五月初旬の初夏のころにふさわしい内容である。

「寝園」の歌群制作の日は、以上述べたように五七忌がその期限ではなく五十日忌を下限とすることが、総計一〇六首の歌の内容から結論づけることは可能であろう。

ただし、五十六（五）首に続く追歌の五十一首と三十二首の相違、すなわち十九首の不採択の意図、理由については現段階では全く不明、不可解としか言えない。

〇おわりに

以上晶子の連作の短歌「寝園」についての疑問を記述したが、こうした問題点をもつことは「寝園」の歌としての価値とは無関係である。夫鉄幹の突然の死から数十日の間にこれだけの数の歌を作れること、またその内容が多種多様で悲嘆のどん底にあって、夫へのまた子どもへの、新詩社の社友への配慮を失わない一方で、直接表現に近い形の鉄幹に対する恋情を詠む、などは天性の歌人、歌詠みとしか言いようがないのではないかと思われる。一〇六首の歌を一首ずつ吟味することを次の課題としたいと考えている。

最愛の夫であり師である鉄幹が、十一人の子どもたち、新詩社の弟子や、「明星」以来「冬柏」に至る友人や社友たちを残しての急死は晶子に再起不能の大打撃を与えたのは容易に想像のできる大事件であった。一〇六首あるいは八十七首の「寝園」の連作の短歌は、晶子の鉄幹に対する心からの悲痛な叫びともいうべき愛のアンソロジーまた結晶であり、中国風に言うならば妻晶子が夫寛に捧げた「悼亡の詩」に値するものと言えるのではないだろうか。

〔注〕

①吉田学軒は吉田増蔵。宮内庁図書寮編修官、奈良女子高等師範教授等を歴任し、元号「昭和」、今の天皇の「明仁」の名や他の宮家の号なども学軒の考案によると言われる。

学識のある漢文の大家。鉄幹は亡くなる一ヶ月前の二月に七十の古稀を迎える学軒のために賀宴を開くべく奔走していた。

②五四「取りて泣く隣の閨にさしのぶる十七の子の細き手の指」の歌は、末娘六女の藤子のことを歌ったもので、鉄幹の死後健康の優れなかった母晶子のそばに寝ようになったと、藤子氏自身が語っている。（父・寛と母晶子の思い出あれこれ）